拝啓　今年も早や6月末となりました。いつもエンカウンターをお読み頂きありがとうございます。近所の公園では、あじさいの花、ねむの木の花がきれいに咲いています。

今回は、小西芳之助先生の『エペソ人への手紙講解説教』からの引用の第1回目です。今回のエンカウンターの3頁「聖書は永遠の命を与えることを書いている」には、次のように書かれています。

「聖書は永遠の命を与えることを書いている

根本問題のついでに、この前の私のガラテヤ書大観について、少し申し上げたい。ガラテヤ書の最後の文句に、6章の最後の所に「わたしは十字架につけられて、十字架だけが私の信仰だ。十字架だけ、これだけを宣伝している」と、「十字架のあがないを宣伝しているので、生きているんだ」と、「世の中は私には十字架につけられているし、私は世の中に対して、十字架につけられている」と言っております。

これは少し分かりやすく言えば、この世は私に魅力はないし、私もまたこの世に魅力がないということです。そうですから、信者というものは、この世に魅力がない、そういうクリスチャンにならないといいけない。そういうクリスチャンが本当に世の中のためになる、そういう人が本当に世の中、人類に益する人になる。

そういうことも聖書の言葉によってキリスト教を理解する。キリスト教というのは聖書の理解です。そういって聖書は聖書によって理解する。そうですから、聖書をいくら勉強しても、勉強しすぎるということはない。それは英語は英語であって勉強するのとよく似ている。

この点は、言葉はまずいですが、我々は生まれつき、この世が中心になっている。この世というものに興味があるんです。聖書は天国、永遠の命を与える、ということを書いている。聖書は、永遠の命のことを書いている。」

小西先生からいつも教わることでありますが、改めてこの事を胸に刻みたいと思います。

私は、小西先生の「エペソ人への手紙講解説教」の本を編集出版した時に、あとがきに要旨次のようなこと話書きましたので、再録いたします。

「筆者は、2010年2月、テマサトラベルの「トルコ・パウロの旅」に参加し、エペソを訪問しました、エペソには、古い町の遺跡が残っており、巨大な円形劇場、立派な図書館、大きなヨハネ教会の跡などが残されていた。このトルコ旅行以来、私は、エペソがキリスト教の形成過程で、重要な役割を果たしたのではないかと考えるようになりました。そのように考える理由。

① テモテがエペソ教会の監督になったと言われること。

② テモテの後、オネシモという人がエペソ教会の監督になったこと。監督オネシモは、ピレモン書に出てくるオネシモと同一人物であるという学者がいること。

③ エペソには、大きなヨハネ教会の跡があるが、ヨハネがエペソに住みヨハネ文書を書いた可能性がある。

④ パウロ書簡は、紀元140年ころ、ローマでマルキオンという人が集め、編集したと言

われるが、その前に誰かが、パウロ書簡を収集し、編集を行っていたに違いない。それがテモテ―オネシモを中心とするエペソ教会に連なる人たちではなかったかと思う。

⑤　ピリピ書も、エペソの獄中で書かれたと考えた方がつじつまが合う部分が多い。

⑥　コロサイ、ラオデキア、ヒエラポリスは、エペソの近くであり、エペソ教会が、これらの教会を指導したと考えられる。

⑦ ヨハネの黙示録に出て来る 7 つの教会もエペソから遠くなく、エペソ教会の指導を受けたと思われること。ヨハネ黙示録が書かれたパトモス島も、エペソからそう遠くない。

⑧ ヒエラポリスには、ピリポの教会跡があり、ピリポが住んだという説明を聞いた。

⑨ エペソには、マリア教会があり、イエスの母マリアをヨハネが晩年預かり面倒を見たという説明を聞いた。

⑩ エペソは、ギリシアのコリントとエーゲ海の対岸の位置にあり、船による行き来があった。

聖書学者の方々に、この素人の考えを検証して頂くことを期待する。

この一月に読んだ『一日一生』等の本から、感銘を受けた言葉を紹介します。

小西芳之助先生『主の御名を呼ぶ』6 月 14 日

「イエス・キリスト―我らの主

共観福音書（マタイ、マルコ、ルカ）は、イエス・キリストの話であり、ヨハネ福音書は、キリスト・イエスの話である。前者は、イエスにつき、人間としての立場から書き、後者は、神としての立場から書いている。

この理解により、両者の違いについての多くの問題を解くことが出来る。

もし、4 福音書のみならず、使徒行伝、書簡、黙示録を学ぶならば、明らかに、イエスはキリスト、我らの主であることを知るであろう。

神よ、我らをして、イエスをイエス・キリスト、我らの主として信ぜしめよ。」

新渡戸稲造先生『一日一言』6 月 9 日

「今日は曇る今日は雨降ると、不平を並べ立てても空は晴れぬ。雨が降るなら、傘 1 本でわが行動は定まる。事に当たり、くよくよ呟きてわが望みの叶うものなら、人生は寝ぼけ奴の現に過ぎぬ。事を決するのは断行である。断じて行えば鬼神も避く。」

松下幸之助先生『続・道をひらく』「このめでたさ」

「どんなに小さいことでもよい。どんな一隅にあってもよい。やっぱり、人につくし、世につくし、自分も幸せなら他人も幸せ、そんな働きをしてみたい。そんな支えになってみたい。

結婚のめでたさとは、つまり縁を得た男女が一つになって、この働き、この支えの力を、

さらにゆたかに、さらにうるおいあるものにするところにある。別に難しく考える必要はない。今日の一日を、そしてあすの一日を、二人の力で、少しずつ、少しずつ充実させてゆけばよいのである。その怠りさえなければ、結婚のこのめでたさは、世と人の祝福をうけつつ、限りもなく続くであろう。」

内村鑑三先生『続 1 日一生』6 月 13 日

「日本国の如き不信国においては、キリスト教の信仰を維持する事だけが、伝道的に見て一大事業である。別に教会を起こすに及ばない。多数の信者を作るに及ばない。宗教的大著述をなすに及ばない。日本国において純福音を信じ通すことは至難の業である。そのことは、ひとたび信仰に入りし者にして、千人は我らの左に倒れ、万人は我らの右に倒れしによってわかる。ことに教会又は外国宣教師等、外来の援助にたよることなくしてキリスト教の信仰を守り通すことは至難の業である。そうしてこのことを為し得て、我らは大事をなし得しことについて神に感謝すべきである。あるいは 30 年、あるいは 40 年、あるいは 50 年、この社会の冷淡、嘲笑、反対の中にわが信仰を維持することを得て、われは良き伝道をなすべく赦されたのである。あえて他の伝道事業を企つるの必要はない。内に対しては明白に、外に対しては独立に、一生信仰を守り通して、われらはそれだけにて良き伝道師たり得たのである。」

バークレー先生『ウイリアム・バークレイの一日一章』（5 月 31 日）

「心配するな！

遠くから見ると全く不可能と思われる仕事も実際に直面してみると、不思議に可能となるものである。

とてもできないと言っていたことが、どうしてもやらねばならぬとなると、なんとかできるようになる、というのは全くふしぎである。

困難なことと不可能なこととの違いは、不可能なことの方が少しばかり余計時間がかかるというだけのことだとエジソンは言った。

不可能と見えたことも、いざやらねばならぬとなると、何とかやることが出来る――人生にはたびたびこういうことがある。これはわれわれに励ましを与えてくれるものである。

クリスチャンは楽観主義者でなければならぬ。神の恩恵が彼のうしろ盾となっているからである。

実際にぶつかってみなければ、どこまで耐えられるか、だれにも分かるものではない。また神の助けがどのようなものであるか、実際に絶望のなかから神を呼んでみなければ、分からない。

この問題に対するイエスの勧告は素晴らしい。「明日のことを心配するな。明日のことは、明日に心配させるがいい。一日の仕事と問題は一日だけで充分である。（マタイ 6・34）

先月、生きがいを得るために、フランクルの『夜と霧』を読んでよかったと書きました。ＮＨＫのＢＳ番組「こころの時代」でも、丁度フランクルの紹介を 6 回にわたって放映している最中ですので、感銘深く見ています。

また、6 月 8 日（土）午後立教大学で、荒井克浩さんの著書『無教会の変革――贖罪信仰から信仰義認へ、信仰義認から義認信仰へ」（教文館、2024 年）という図書をめぐって、パネル・デスカッションが行われ、旧約学者月本昭男先生の「新約聖書の贖罪信仰」という報告で大変感銘を受けまして、私の贖罪信仰の理解が少し進みました。

新型コロナについては、病院ではマスクをつけるように指導されていますが、電車の中とかスーパーでも、まだマスクをされている人が半数くらいおられるように思います。マスク、手洗い、うがいなどは、必要と思われるときは実行されて、十分ご注意して、コロナやインフルエンザにかからないように注意されるよう、祈り申し上げます。

2024 年 6 月 20 日　　山口周三

エンカウンターの読者各位